

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 研究室の25周年に寄せて : りんろう時代の思い出とその後   |
| Author(s)    | 中原, 純   |
| Citation     | 生老病死の行動科学. 2019, 23, p. 13-14   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/73611">https://doi.org/10.18910/73611</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 研究室の 25 周年に寄せて — りんろう時代の思い出とその後 —

### My memories of RINRO days

(中京大学現代社会学部) 中原 純

(Chukyo University, School of Contemporary Sociology) Jun Nakahara

この度は、りんろう (あえてそのように呼びます) 開設 25 周年、お祝い申し上げます。大阪大学の大学院に進学したときの歓迎会で、私が「印籠 (いんろう)」のようなフラットか、あるいは「ろう」にアクセントをおいたような発音で「りんろう」と発言したところ、その場にいた人 (たしか中西さんだったと思います) から「りん」にアクセントをおいた発音が正しいと激しくツッコミを入れられました。この大阪の洗礼を受けてから、既に 15 年が経ったと思うと、時の流れの速さを感じます。

さて、私は、2004 年 4 月から 2009 年 3 月までは大学院生として、2009 年 4 月から 2013 年 3 月までは、行動学系共通助教として、9 年間研究室に在籍していました。大学院在学中は、藤田綾子先生や恒藤暁先生、助教時代は佐藤眞一先生や権藤恭之先生に大変お世話になりました。研究室の方との最初の出会いは研究室訪問でした。安部さんに卒業論文の質問紙に厳しいダメ出しをされ、増本さんにフォローされ、後に同級生になる松原くん (図 1; 先日、シンガポールで会ってきました) に車について根掘り葉掘り聞かれたことをいまでも鮮明に思い出します。

その後、苦手な英語を同級生 (本多さん、古村さん、太田さんに感謝) にフォローしてもらいながら何とか博士前期課程を乗り切りました。この当時は、「心理学の研究のやり方・考え方」がわかったと思って喜んでいたら、またわからなくなって混乱するという経験を繰り返していました。今振り返ると、私の知識レベルに応じて、段階的に難易度が上がるよう、先生方に非常に上手く導いていただいていた

のだと思う次第です。博士後期課程では生意気にも (そして乏しい知識で) 先生方のお話に反論することもありました。徐々に研究室の奥まった席に移動し、院生室の主のような立場になったことで、良くも悪くも自信がついていたのだと思います。先生方を大いに困らせたことを申し訳なく思う一方で、一人前の研究者として成長していく過程では必要なことだったのだとも今は感じています。先生方はきっと、すべてお分かりの上で、温かく見守ってくださっていたのでしょう。自分も研究者として独り立ちするようになり、あらためてありがたい経験をさせていただいたと、感謝しています。



図 1. 松原くん (右) とその長男・次男  
(撮影は、旧姓: 堀田さん)

助教になってからは、りんろう名物「先生によって言ってることが違う」「先生の言っていることが先週と違う」といった学生たちの苦情対応をしながら、佐藤先生のご配慮により、自身の研究を進める時間も多くいただきました。また、この頃から研究室の国際色が豊かになり、研究室の院生もどんどん海外の学会で発表したり、留学をするようになりました。研究室が大きく発展していく過程で業務に携われたことは非常に良い経験になり、私自身も留学へと動機づけられました。

さて、阪大から離れた後、東京女子大学、University of Wisconsin-Madison、聖学院大学にお世話になり、2018年4月より、現在の職場、中京大学現代社会学部現代社会学科コミュニティ学専攻に着任しました。キャンパスは豊田市にあり、広い敷地に大きなスケートリンクがあるのが特徴です。現在、3年生18名、2年生14名のゼミ生がいますが、来年はこれに新2年生18名が加わり、総勢50名になります。ゼミ生が多いのは私立大学の特徴ですが、その中でも、1名の教員に50名のゼミ生というのは多い方ではないかと思います。そして、毎年20名弱の卒業論文をみることを思うと、頭が痛くなります。

また、コミュニティ学専攻ということもあり、ゼミ生たちと地域の高齢者サロンを訪問し、「よさこい」の舞いを高齢者向けにアレンジしたエクササイズを実施したり(図2)、プロ野球の中日ドラゴンズ球団と連携したドラゴンズ・プロジェクトとして、ドラゴンズのマーケティングに寄与するような調査を実施したりと、地域に根差した活動を展開しています。これまで私は研究が中心で、地域に飛び出して活動することにはあまり積極的ではありませんでしたが、今はその楽しさにはまりつつあります。来年度以降は、研究室で運営する高齢者サロンの立ち上げを豊田市と連携して進める構想があります。また、ドラゴンズ・プロジェクトでは、ずばり「ドラゴンズ魂の三世継承」と題して、少し私自身の研究も進めていきたいと思っています。

加えて、これも不思議な縁ですが、同じ2018年4月から、中京大学心理学部には後輩の田淵さんも着任しました。近くには先輩の大橋明先生もいらっしやいます。大阪でりんろうの研究室がますます発展

していることに刺激を受けつつ、名古屋の老年学をOB・OGで盛り上げていきたいなと思います。



図2. 高齢者サロンでのエクササイズ風景  
(筆者撮影)

最後に、研究室の思い出といえば、やはり私にとっては、藤田先生との5年間です。入学前は失礼にも、藤田先生がりんろうに着任されることも知らず受験していました。しかし、入学後に導いていただいたテーマ「Productive Aging」は、現在でも私の研究の主要テーマです。在学中はもちろんのこと、修了後も常に気にかけていただきました。2018年4月、職場が関東から名古屋に移り、少し関西に近づいたこともあり、異動のご挨拶も兼ねて、宝塚のご自宅に伺いたいと考えていた中、訃報を聞きました。それから既に半年以上が経過しましたが、未だに受け入れることができていません。先生の元気な姿しか想像できませんし、3月9日の研究室25周年イベントにもひょっこり現れ、「中原さん、名古屋はどう？」と声をかけていただけるとは思いません。とはいえ、あまり長い期間、悲嘆に暮れていては、先生に怒られそうです。先生より与えていただいた研究テーマ「Productive Aging」を、さらに精緻化し、発展させることが大切な恩返しになると考え、前に進んでいこうと思います。藤田綾子先生よりいただいたこれまでのご恩に改めて深く感謝し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。